

# バングラデシュの気候変動対応

山形 辰史

## ●水と生きるバングラデシュ

地球温暖化によって海面が上昇すると標高の低い土地は浸水する。水没する土地面積が広いと考えられている国の代表がバングラデシュである。雨季の日中にダッカ空港に着陸する航空機から眺めていると、国土のかなりの面積が水に覆われていることに感嘆する。

一般に水は恵みであり、この地を「黄金のベンガル」と呼ばしめた稲やジュートの発育の源なのだ。が、それも多すぎれば災いとなる(参考文献①②)。バングラデシュの水害は大きく二つに分けられる。ひとつはサイクロンで、ベンガル湾からバングラデシュを襲う。記憶に新しいサイクロンとしては二〇〇七年のシドルが挙げられる(参考文献③)。死者・行方不明者が四〇〇〇人以上、被災者は九〇〇万人以上に達した。サイクロン

の来襲は一所においてせいぜい数時間であり、たとえて言うなれば「急性疾患」である。これに対して

洪水はバングラデシュのほぼすべての国境で接しているインドから流れる大河を通じて来襲する「慢性疾患」である。というのは、洪水の場合、数十日単位で少しずつ水かさ上がり、浸水域が広がっていくという形で被害が発生し、被災者数はサイクロンより多いのに、死者はほとんど出ないからである。筆者は一九九八年、バングラデシュが史上最大といわれる大洪水に見舞われた際に初めて同国を訪問したのであるが、首都ダッカのグ

ルシヤン地区において、浸水は毎日約二メートルずつ進行していた。このように洪水は予測可能で、季節的な現象である。農業のためには、肥沃な土を定期的に運び込む役割を果たしており、「恵み」

の側面を有している。

## ●北限の地の洪水

一方、洪水は徐々に土地を浸食するので、浸食された土地に住居や農地を有していた人々にとって大きな被害をもたらす。筆者は二〇〇九年から二〇一二年の間、調査のため、年に二回程度、バングラデシュ北西部のロンプール管区を訪れた。ロンプール管区のなかでも、ガイバング県、クリグラム県、ラルモンルハット県は、インドのアッサム州、メガ

ラヤ州から流れ入る大河川ブラフマプトラ川(バングラデシュではジヨムナ川と呼ばれる)や、その支流のティスタ川によって、流域の土壤浸食が激しい。この地は、ベンガル湾から五〇〇キロの距離にあり、ブータンやネパール国境まで二〇〇キロの近さなので、冬

の朝は一〇度以下にまで気温が下がる。そんな内陸部でありながら洪水の被害が大きいことが、筆者には意外であった。それほどまでにジヨムナ川の水量は大きく、いったん川の真ん中まで舟で行けば、(近眼の筆者には)もう兩岸が見えないほどの川幅である。川のかなには無数の中洲があり、小さいものは日本人の感覚どおりの規模であるが、大きいものは川のなかの島である。大小まとめてベンガル語でチヨル(চৈল)と呼ばれている(参考文献④)。

チヨルの端や河川敷は、洪水の際には水没したり土壌が失われたりする。そして乾季になると再び肥沃な土地として浮上する。したがって、土地登記がなされていないことが多く、低所得層にとって便利な農地となる。つまり、水没しやすいところには低所得層が居住する傾向にあり、洪水の際に避難を余儀なくされるのも低所得層の人々ということになる。地球温暖化によって海水面のみならず、川の水位も上昇すれば、低所得層の居住域も狭まることとなる。

## ●パリ協定の評価

当然のことながら、バングラデ



崩れた川岸を新しい船着き場にして救援米を運び入れる  
(クリGRAM県、2012年筆者撮影)

シユ政府は地球温暖化に敏感である。COP21から帰国した環境・森林大臣アンワール・ホセイン・マンジュは、会議の結果がバングラデシユの利益にかなったものであったことを強調した(参考文献⑤)。気候変動対策は、適応策(adaptation)と緩和策(mitigation)に分けられ、医療にたとえていえば、前者が治療、後者が予防に当たる。既に大きな被害に直面しているバングラデシユとしては、緩和策より適応策に資源配分を多くして欲しいところである。マンジュ大臣はその点でも「言うべきことは言った」と胸を張った。

## ● バングラデシユの気候変動対応

温暖化脆弱国バングラデシユの環境・森林省は、二〇〇九年に「気候変動戦略・行動計画」を策定し、これに基づいてバングラデシユ気候変動信託基金(BCCTF)を設立した。これと並行して、イギリス、オーストラリア、スイス、スウェーデン、デンマーク、アメリカ、EUの出資によりバングラデシユ気候変動レジリエンス基金(BCCRF)も設立され、両基金がバングラデシユ政府の行動計画を支えている(参考文献⑥)。報道によれば、バングラデシユ政府はBCCTFに約二〇〇億タカ(約三〇七億円)の支出を約束し、二〇一四年六月までに、二一八の政府プロジェクト、六三のNGOプロジェクトが基金の支援を受けている。NGOプロジェクトは、これまでNGOにマイクロファイナンスの元手を融資する政府機関として機能していたPKSF(農村活動支援基金)を通じて資金が配分されている。具体的には、災害早期警報システム、災害に強い稲の新品種導入、植林、治水インフラ、太陽光発電、深井戸、行政官の能力開発がプロジェ

クトの内容である。

BCCTFのような基金をLDC(後発開発途上国)が設立するのは初めてのことと、バングラデシユ政府の気候変動課題への思い入れの強さが窺われる。

(やまがた たつふみ/アジア経済研究所 国際交流・研修室長)

### 《参考文献》

- ① 内田晴夫「資源としての水と災害——恵みとしての洪水」(大橋正明・村山真弓編『バングラデシユを知るための60章』明石書店、第八章、二〇〇三年)。
- ② B・L・C・ジョンソン著、山中一郎・松本絹代・佐藤宏・押川文子訳(『南アジアの国土と経済 第2巻 バングラデシユ』二宮書店、一九八六年)。
- ③ 日下部尚徳「バングラデシユにおけるサイクロン防災と住民避難に関する研究」(『上智アジア学』第二九号、二〇一一年)一三七―一五三ページ。
- ④ アブー・シヨン
- ⑤ S.M. Munjurul Hannan Khan, Saleemul Huq and Md. Shamsuddoha, "The Bangladesh National Climate Funds," LDC Paper Series, International Institute for Environment and Development, 2012.
- ⑥ S.M. Munjurul Hannan Khan, Saleemul Huq and Md. Shamsuddoha, "The Bangladesh National Climate Funds," LDC Paper Series, International Institute for Environment and Development, 2012.
- ⑦ Rana Dutta, "Climate change: Can Bangladesh win the battle of climate finance?" *Financial Express*, December 1, 2015.



降雨により亀裂が入り、今にも崩れそうな川岸  
(ラルモニルハット県、2010年筆者撮影)